

舌津智之 著

『抒情するアメリカ
——モダニズム文学の明滅』

これは執念の書である、というのが読後に抱いた率直な感想だ。著者にとって「抒情」という主題がどれほど重要であるか、その切実さがすべてのページから滲み出ている。

とはいえ、前作と比べて本書が特別な手法で論じられているわけではない。むしろ方法論は一貫しているといえるだろう。1970年代の歌謡曲を論じた『どうにもとまらない歌謡曲——七〇年代のジェンダー』（晶文社、2002年）は歌謡曲ファンのみならず商業音楽に少しでも興味があるものは誰しも手に取るべき名著だが、本書においても著者の姿勢はまったく揺るぎない。作品との愚直な対話を通してテキストに潜む〈境界〉の恣意性を暴きだし、個々の作品の詩情をすくいあげる手腕はますます冴えている。

本書で扱われるのは19世紀半ばから20世紀後半までに発表されたアメリカの文学／音楽作品である。先行するロマンテ

ィシズムや後続するポストモダニズムとの差異を周到に理論化したうえで、著者はこの期間を「モダニズム」の時代として拡大的に定義する。素朴な感情の発露というロマン主義的な身振りに対して禁欲的になりつつ、かといって創作主体を放棄するポストモダンな状況に居直れるわけでもない。結果的に、この「一世紀少々の時空」では「よりストイックな属性」を帯びた〈感傷〉が、いわば「抑圧の回帰を本質的な構造」としながら〈抒情〉へと転化する。こうして著者は、男性と女性、白人と黒人、そして動物と人間などあらゆる境界を溶解させながら、この「逆説の領分」である〈抒情〉を執拗に突き止める。

かくしてメルヴィルを論じた章では、男性登場人物の女性性と不在の女性登場人物（寡婦）の男性性が対比されながら「恋愛小説」としての『白鯨』という驚くべき可能性が浮上する。また黒人文化の探求者という従来のイメージを覆すハーストン論では、民俗／都市という対立項を無効にしつつ、ブロードウェイに憧れ続けた作家の意外な側面が明らかになるだろう。さらにジュナ・バーンズとヘミングウェイの比較を通して浮き彫りになるのは、動物／人間の境界の不安定さがセクシュアリティの多様性と結びつく過程であり、そうした周縁化された存在そのものの歴史性である。

本書ではテキストを通じた作家同士の「創造的対話」も鮮やかに示される。とくに後半、それまで単独で論じられた作家たちの思わぬ共振——エリオット、テネシー・ウィリアムズ、そしてジュナ・バーンズの作品にみるカニバリズム、カポーティとキャザーの南部性、ナボコフを経由したポウとカポーティの反異性愛主義的なポリティックス——が次々に指摘される展開は圧倒的にスリリングである。

だが、このように作品を読み解く方法論は一貫しているものの、本書から受ける印象は前作とはだいぶ異なっている。前作で感じられた著者の余裕——それは論じる対象と華麗な文体の一致がもたらす「どうにもとまらない」疾走感である——は影を潜め、どちらかという息を呑むほどの切実さが全編に漂うのだ。たとえばサローヤンを論じた章（個人的に、終章のビーチ・ボーイズ論と並んでもっとも心を揺さぶられた章である）で著者は自らの手法の正当性を主張するために例外的に踏み込んだ発言をしているが、その「涙の詩学」を全力で擁護する姿にはいわくいいがたい迫力が伴っている。

そしてそれは著者自身が自覚するように、〈文学〉と〈抒情〉の制度的な折り合いの悪さに起因するものだといえるだろう。歌謡曲と〈抒情〉が常に寄り添いながら発展してきたのに対して、これまで文学——とりわけモダニズム文学——と〈涙〉の相性は決して良かったとはいえないのだ。

しかし、抑圧の力が大きければ大きいほどそれが回帰する瞬間の輝きが増すという著者の定義に従うならば、こうした束縛によってむしろ本書のリリシズムはよりいっそう高まるともいえるのだ。執拗なまでにテキストと格闘する緊迫した文体の狭間にふと浮上する著者の切なる想い——その胸を締め付けるような〈抒情性〉こそが本書の唯一無二の魅力をかたちづくっている。（研究社、2009年6月、四六判 vi+288頁、2,800円）

——大和田 俊之（慶應義塾大学准教授）